モスリン　～由来と用途～

モスリン（Muslin）は、メソポタミアのチグリス川西岸の都市モスル（現イラク）で織られた薄手の単糸・平織りの綿布で、アラビア人がモセリニ（Mosselini）と名付け、他地方へ輸出し、フランスでモスリンと呼ばれたのがその由来である。つまり、もともとは上質の綿単糸を使用した、平織の綿布であった。羊毛・絹のモスリンを毛モスリン、絹モスリンと呼び、フランス語でMousseline de LaineおよびMousseline de Soiesと表記する。

わが国への伝来は、慶長年間（1596-1615）に伝わったゴロフクリン（grof-grain、オランダから輸入された毛織物）が初めのようで、その後、幕末期に輸入された羊毛のモスリンはメリンスまたは唐縮緬（とうちりめん）などと称された。明治末期には毛織物の輸入が急増するなか、毛布やラシャとともに衣服や日用品としてモスリンが使用されるようになった。

日本でモスリンと言えば、羊毛モスリンを指す。モスリンは、絹織物よりも安価であるが、軽く、温かく、輸入化学染料による友禅染法の確立により、鮮美な模様の着尺ができるようになり、大衆的な着尺として普及した。日本の和服文化を育てたモスリンであったが、現在は需要は減少している。

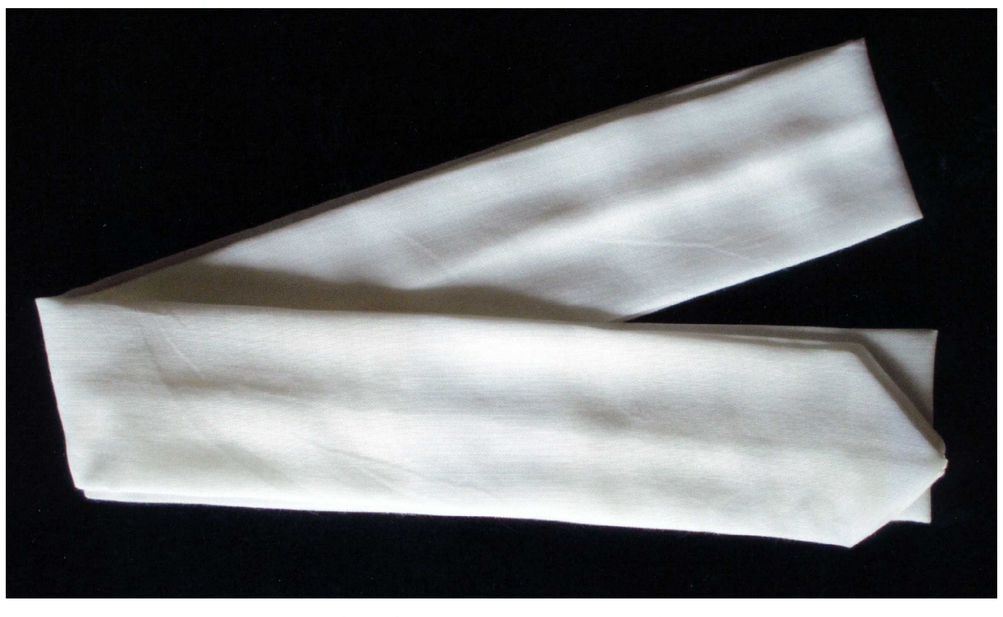
モスリンの種類と用途

モスリンの主たる用途は着尺（着物の反物）である。着尺の中に捺染（友禅）モスリンと無地モスリンとがある。

- ◆捺染モスリン　蒲着物の表地（友禅、小紋）、長襦袢（主として友禅）など
- ◆無地モスリン　裾除け、八掛など

モスリンの着尺以外の用途として、布団裏地、布団表地、風呂敷、幕地、国旗（日の丸）、家具裏などがある。

左上・右上・左下：
捺染モスリン（友禅）の長襦袢　（個人蔵）



無地モスリンの腰紐
（個人蔵）

参考文献：丹羽昇一『織物講話』、西村益者『実用織物の研究　第２部』、染織と生活社『月刊染色α』2006 年 7 月号及び 2007 年 7 月号、似内惠子『明治・大正のかわいい着物 モスリン』、中江克己編『染織辞典』、